

大学教育だより



RDHE 2010.3 No.7

Center for Research and
Development of Higher Education

大阪市立大学
大学教育研究センター

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
(全学共通教育棟5階)

<http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/>

大学教育だより No.7

Voice～学生の声

Campus Inquiry

Center Now & Human

Letter for Students

- 経済学部学生の創造都市研究科社会人大学院生訪問インタビュー
- ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！
都市健康・スポーツ研究センター/英語教育開発センター/商学部・経営学研究科
- 大学教育研究センターの活動・研究・スタッフ紹介
- 学生たちの手紙に対する教育担当副学長の返信

アン ロゾ (Un roseau) No.11 : 縦書き部分

- 鈴木 洋太郎 先生 (経営学研究科・商学部)
- 市村 彰男 先生 (理学研究科・理学部)



経済学部学生の創造都市研究科 社会人大学院生訪問インタビュー

テーマ：創造都市研究科社会人大学院生 vs. 経済学部生

社会人大学院生、社会人として働きながら大学院で研究をする、二足のわらじを履きこなす人々。なぜこのような道を選んだのか？ どのような研究をしているのか？ 研究と仕事の接点は？ そういった疑問に答えを出すべく、師走のある日、経済学部長尾ゼミの4回生、学生Aくん、学生Bさん、学生Cさんの3人が長尾先生に伴われて、梅田の大阪駅前第2ビル内、梅田サテライトにある創造都市研究科瀬田先生のもとを訪れた。瀬田先生が指導されている社会人大学院生に質問をぶつけようというのだ。受けて立つ社会人大学院生は、ハウスメーカーにお勤めの院生Dさん、不動産鑑定士の院生Eさん、まちづくりNPO法人の院生Fさん、都市再生機構の院生Gさん、



住宅開発コンサルティング会社経営の院生Hさんである。長尾先生も瀬田先生も都市問題を研究テーマにされているので、共通の関心分野をもつ学部4回生と社会人院生が一同に会したことになる。

【なぜ社会人大学院に？】

- ・学生Cさん：お仕事でお忙しい中、社会人大学院に入学しようと思った動機を教えてください。

経済学部学生の創造都市研究科 社会人大学院生訪問インタビュー

- ・**院生Dさん**：入社後13年目に、「同じ会社、組織にいても同じ考え方の人とつきあっていくことになり、他の人々の考え方から遠ざかってしまうから、他の人々の考え方に接する機会が欲しい」と感じたからです。もう一つの理由は、仕事で地方が大阪以上に衰退していることを目の当たりにして、これから地方がどうなるのかを（大学院で）学びたかったからです。大学院が梅田にあるので通いやすいという理由もあります。
- ・**院生Eさん**：不動産鑑定士の仕事の延長ですね。京阪沿線での仕事が多いのですが、門真、守口、寝屋川市は人口が急激に減っています。これらは大阪市への通勤が便利なのになぜこのようなことが起きるかを理論的に知りたかったというのがあります。梅田で通いやすいのもあり、子育てが楽な2年間で卒業したいというのも（創造都市研究科を）選んだ理由です。
- ・**院生Fさん**：アート系の仕事につきたいと思っていましたが、その中で「芸術ありき」という視点ではなくアートの効果を経済的な視点で測定したいと思いました。それで創造都市研究科を見つけたんですが、社会人でなければ入れないので派遣社員になって研究科への入学をはたしました。おかげさまで、今は三重県のNPO法人に勤めてアート関係の仕事に従事しています。
- ・**院生Gさん**：今まで仕事に関わってきたこと、例えば公団住宅のストックマネジメントなどについて考えてきたことをまとめてみたいと思ったからと、ここらへんで人生の充電期間を持ちたいと思ったからです。もちろん、修士論文を書くとなると放電もしなければならぬのでしょうか。
- ・**院生Hさん**：コンサルタントとして住宅開発プロジェクトに多く携わってきたのですが、広い都市という枠組みを研究したいと思ったからです。仕事となるとどうしても感覚的なものに頼ることになっていたが、これからはアカデミックな考え方でも出来るようになりたいと思いました。今やっている開発プロジェクトの仕事を10年後20年後にアカデミックな言葉でまとめるために必要な力を身につけたいと思っています。



【二足のわらじって履きづらくありませんか？】

- ・**学生Cさん**：仕事と社会人大学院の勉強の兼ね合いはいかがですか？
- ・**院生Hさん**：やっている仕事と大学院でやっている授業や研究との直接の結びつきはないので、すぐ仕事に役立つというわけではないです。しかし、都市という共通の枠組みで研究しているおかげで、今まで見えていなかった視点で仕事をみる事が出来るようになったとは感じます。一つの開発プロジェクトでも、その背景にあるものを意識してマクロ的に仕事に取り組めるようになったのは成果です。でも、

試験が重なったときは仕事と勉強の両立はかなりしんどいですね。

- ・**院生Gさん**：梅田サテライトは職場から徒歩10分足らずなので時間的な口はほとんど無く恵まれています。「仕事に関連して考えたことが（修士）論文になればいいかな」と考えているので勉強と仕事の両方にとってプラスになっています。仕事と勉強の両立には、気持ちの切り替えが必要なので、日曜は剣道だけに集中するなど、オン・オフの区別を大切にしています。
- ・**院生Fさん**：前、派遣社員をしていたときは、勤務時間に融通が利きました。レポートが忙しいときには休ませてもらったりとか。今は三重県のNPOで古民家の再生の仕事、具体的には空き家バンク、アート支援、まちづくりなどを行っているのですが、大学院で触れることができた、アートと正反対のところにいる人たちのものの見方が仕事に大変役立っています。かつては、その人たちとの意見がかみ合わず、つらい気持ちになったことも多々あったのですが、やはり、いろいろな分野の考え方を吸収できたのがよかったですね。



- ・**院生Eさん**：自営業なので時間は自分である程度コントロールできます。でも、仕事が忙しいときにはやはり課題をこなすのは大変です。でも、私の勝手な受け取り方なんですが、社会人ということで先生方もやさしい（院生教員爆笑）ような気がします。仕事が忙しいせいで課題が進んでなくても許してくれるような気がしています。
- ・**院生Dさん**：創造都市研究科は研究分野が多様ですね。アートとかがあったり。自分が興味を持てる分野、持てない分野が色々あって、最初はどうかって思いました。でも、いろいろな人の話を聞いていくうちに、そういう考え方があるんだと思うこともあり、また、後々仕事で使えるネタがあることもあったりで、よかったなと思っています。でも、業務との時間的兼ね合いはしんどいです。職場の理解のおかげでなんとか両立出来ています。

この後、4回生の学生Bさんが、卒論のテーマである古民家を活用した地域再生について、質問した。NPOで古民家の再生の仕事をされている院生Fさんを中心に答えて頂いた。4回生の学生Aくんは卒論のテーマであるエネルギー問題に関連して、太陽光発電、エコポイント制度が住宅建設に及ぼす影響や共同住宅における太陽光発電導入の問題点などを質問した。こちらは、院生Dさん、院生Eさん、院生Gさん、院生Hさんなど、仕事で住宅、不動産、土地開発に従事されている社会人院生に答えて頂いた。この質疑応答が卒論に大変役立ったと

のこと。内容が専門的になるので、詳細は割愛させていただいた。
社会人院生たちが学部生へのアドバイスとして熱意をもって語ったのは、「学べ」ではなく、意外にも「資格のことも大事だが、もっと遊べ、もっと旅をせよ、大学時代の友を大事にせよ」であった。

【社会人院生からのアドバイス】その 1 — 資格と遊び —

- ・学生 C さん: 4月から社会人として働くんですが、4月までに学生としてこういうことをやっておいた方がいいと言うことはありますか？
- ・院生 F さん: みなさん(車の)免許とかお持ちですか？
- ・院生 D さん: 資格試験の勉強なんかとすると、学生の間にやっておいた方がいいですね。働き始めると勉強するのは時間的に大変なんですね。会社って資格で評価されるようなところがあるので、資格は持っておいた方がいいですよ。
- ・長尾先生(経済): 銀行なんか勉強させられるよね。
- ・学生 A くん: 僕こんど1月に(資格)試験です。
- ・院生 D さん: そういふのは絶対とっておいたほうがいいよ。
- ・飯吉先生(大教センター): ただ、資格の勉強は、結局、会社に入ってから仕事で必要になるものをたくさんさせられますね。8年間くらい銀行に勤めていましたが、その間ずっと仕事の時間外や休日には資格試験の勉強をしてました。女子寮で、「私たち休みの日まで何やってんだらう」と言っていました(笑)。



- ・長尾先生(経済): 大学の先生だけは何も資格を持っていない人もいますよね。車の免許さえも持っていない(皆爆笑)。
- ・院生 D さん: 仕事に必要な資格はすべてとりました。しかし、資格と仕事はまた別物です。すべての資格が仕事に使えるとは限らないし、資格と知識も別物です。
- ・院生 G さん: 僕は大きい遊んでもらいたいですね。旅行もかりで、いろいろなところでいろんな人と会って。社会人になると中々まとまった休みも取れませんから。体もまだ若いですから。それと、最後は体力勝負ですから、体を鍛えて頂きたいですね。
- ・院生 H さん: 学生時代に遊んでいた方がいいのではないのでしょうか。大学時代真面目だと反動で社会人になってめちゃくちゃ遊ぶようなケースがよくあります。爆発するんでしょうね(笑)。逆に学生時代遊んでいた人は社会人になったらそんなに遊んでないんですよ。

【社会人院生からのアドバイス】その 2 — 広い関心、大学時代の友人、勉強 —

— 社会人院生から学部生へのアドバイスを さらにお願いします。

- ・院生 F さん: 偉そうに言える立場ではないのですが…私は外国語学部だったのですが、アメリカに留学したときにアートにはじめて出会い、今それを仕事にしています。だから、(専攻学部とかにとらわれず)初めての試みとか自分の関心の

ない分野にも手を出してみると、面白いのかなと思います。

- ・院生 D さん: 企業は組織なので自分の意見を言えないという面があります。また、考え方が偏ってしまいがちです。ですから、大学時代の友達とかネットワークを大事にして頂きたいですね。まじめに年賀状をだしたりしてね(笑)。大学時代の友人は相談しやすいですからね。学生さんには実感がわかないかもしれませんが。



- ・院生 F さん: しがらみがないですからね。社会人になってから出会った人は友達って感じになりにくいですからね。大学時代の友達は本当に大事だと特に最近思います。
- ・院生 E さん: 外国語学部で中国語を専攻していましたが、部活とバイト漬けの毎日で、勉強しなかったです。もっと勉強すれば良かったと社会人になって思いました。勉強の仕方がわからないまま卒業したのは残念です。

【学生・院生の感想】

- ・学生 A くん: 働いている人に話をきけたのがよかったです。就職後の不安はあります。だからこそ、働きながら大学院とは尊敬できると思います。
- ・学生 C さん: 内定先からは、残りの学生生活を遊ぶようにといわれていますが、少しは勉強しようかと思っています。社会人院生と話をするのははじめてで新鮮でした。
- ・学生 B さん: 働きながら勉強とは、意識が高いと思いました。卒論についてのご意見ありがとうございました。
- ・院生 D さん: 大学生と話をするのは久しぶりです。初々しい気持ちを忘れないようにしたいと思います。
- ・院生 E さん: まじめだなと感じました。私のときとは違いますね。社会人になったら、旅行はなかなかいけなないので、学生時代には是非行ってください。
- ・院生 F さん: 就職難の時代に内定もらって卒論に取り組むというだけで、自信を持っているのではないのでしょうか。あと、是非三重に遊びにきてください。

— 今日はどうもありがとうございました。

【参加教員の感想】

- 都市がテーマということで、私のゼミに白羽の矢が立った。3回生は二部学生のみなので、卒業論文で忙しいはずの4回生が参加した。卒業論文に関する質疑応答は、勉強になったようだ。社会人大学院生が言われているように、学生時代のネットワークを大事にしてほしい。

(経済学研究科 長尾謙吉先生)

- 「少年易老学難成」収録後、社会人院生から口々に「今の学生サンは真面目だ」との声。彼らは今、仕事と家族を抱え、何倍も苦勞して勉学に励んでいる。今の学生サン、落ち着いて勉強できるのは今のうち。でも万一遅すぎたら創造都市があります。市大に戻ってきて下さい。

(創造都市研究科 瀬田史彦先生)

文責: 大学教育研究センター兼任研究員
経済学研究科准教授 中川 満

ウチの学部・研究科ではこんな教育を行っています！

都市健康・スポーツ研究センター

理論と実践の連携 ― 大学生だからこそ「健康・スポーツ」

社会における健康への関心は、我々を取り巻く自然・社会環境の変貌に伴い益々高まっています。環境の変化に適応し、生涯にわたって健康で活動的な生活を営むためには、自己の身体機能や健康についての理解を深め、生涯を通して身体運動を実践できる知識と能力を身につけることが重要であるといわれています。特に、身体のあらゆる機能の発育・発達が充実・完成を迎える大学生期において、新しい時代に即した健康・スポーツの情報を獲得し、身体活動の科学的な理論に即した実践法を習得することは、将来、健康で豊かな文化生活を送るために必要不可欠であるといえます。

都市健康・スポーツ研究センターでは、全学共通科目の授業として「健康・スポーツ科学科目」を開講しています。健康・スポーツ科学科目は、健康・スポーツに関する知識と理論を習得する「健康・スポーツ科学講義」と、理論に基づく実践法を習得する「健康・スポーツ科学実習」から構成されています。発育・発達の完成期にあたる大学生が、健康・スポーツに関する知識と理論、そして身体活動の実践について系統的に学び、理解を深められるよう教育カリキュラムを構成しています。

1. 知識を身につけ理論を学ぶ

(健康・スポーツ科学講義)

健康・スポーツ科学講義は「健康運動科学」「体力トレーニング科学」「スポーツ実践科学」の3領域で構成されており、健康・スポーツの実践へと繋がる知識と理論についての講義を行っています。

健康運動科学では、現代社会における健康問題を取り上げ、生活習慣病の予防や運動処方について、さらには青少年期において健康を貯えておくことの重要性に関する理解を深め、生涯にわたる健康づくりの知識と理論についての講義を行っています。

体力トレーニング科学では、日常生活での動作やスポーツパフォーマンスの改善を目標とするトレーニングの有効性について、基本的なスポーツ動作を「二軸動作」という新たな視点などから解析するとともに、生理学的な適応能の仕組みや運動に対する制限因子についての知識を習得し、実践力を養うことを目標として講義を行っています。

スポーツ実践科学では、学生が身体運動に対する生理学的な適応についての理解を深め、生涯を通じてより健康的で活動的な生活を創造できる能力を習得することを目標として、個々の目的に応じた効果的なスポーツ実践方法の知識と理論について講義を行っています。

2. 「なるほど!」を習得する

(健康・スポーツ科学実習)

健康・スポーツ科学実習は、講義の3領域に対応する「実験実習(3領域)」と「スポーツ実習(10種目)」によってカリキュラムが構成されています。

実験実習では、人体を対象とした運動中の生理的応答、適応の仕組み、スポーツスキルの評価などについて、実験

装置を使用して科学的に解析を行い、人間の身体について客観的かつ科学的に理解することを目指しています。

スポーツ実習では、種々スポーツ種目を教科材料として、講義や実験実習で習得した知識と理論をもとにスポーツ活動を実践的にを行い、生涯を通してスポーツや身体活動を実践する資質と能力を習得することを目指しています。また、スポーツ実習の体験を通して、コミュニケーション能力、自己表現力、協調性、社会性などに対する理解を深めるなど、全人的な教育という観点からもスポーツ実習の教育に取り組んでいます。

障がいのある学生や、様々な事由によってスポーツ種目の実施が困難な学生に対しては、各自の体力や身体のコンディションに合わせた身体の調整法などを習得する「健康管理コース」を開講しています。

このように都市健康・スポーツ研究センターでは、全ての学生が健康・

スポーツを実践し、その意義について深く理解できるよう教育カリキュラムを構成しています。

3. 新時代の健康・スポーツ教育に向けて

(都市健康・スポーツ研究センターの取り組み)

都市健康・スポーツ研究センターでは、FDのための公開授業や、健康・スポーツ科学科目担当者全員が参加する意見交換会などにおいて、教員相互の活発な意見交換を行い、教育における資質の向上や授業の改善に努めています。また、授業評価アンケートだけではなく、学生が自由に意見や質問を行うことが出来るコンテンツをホームページ上に開設しています。健康・スポーツに関する学生の意見等を分析しながら、都市健康・スポーツ研究センターの各教員は、さらなる資質の向上および授業の改善に向け、一丸となって取り組んでいます。

大学教育研究センター兼任研究員

都市健康・スポーツ研究センター准教授 荻田 亮



ウチの学部・研究科ではこんな教育を行っています！

英語教育開発センター

英語教育開発センターとは

全学共通教育科目の英語(College English)を提供している母体が、英語教育開発センター(English Education Development Center)です。EEDCは全学共通教育棟の5階にあります。

英語教育開発センターのスタッフ

本学の副学長が所長、文学研究科の兼任教員が副所長を務めます。センター事業を支えるのは、センター専任教員、センター特任教員、センター兼任の文学研究科教員とセンター担当事務職員です。

英語教育開発センターの仕事

市大の共通教育の英語は、中学・高校で培った英語力に基づいて、1年で音声英語の運用能力、書記英語の読解力の向上を目指します。2年では、1年で培った英語力の強化と専門科目への応用力を身につけることを目的とします。EEDCでは、この目標を実現するために様々な活動を行っています。まず、EEDCの主な業務は、教務に関することです。業務内容には、シラバスと時間割の作成、共通テストとアンケートの実施があります。それと同時に、EEDCの担当するCollege English(CE)やAdvanced College English(ACE)の運用基盤整備も重要な任務です。次に具体例を示します。

(1)カリキュラムの見直し

英語に触れる機会を増やすことにより英語に慣れるようにするために、1年生のクラスの大半をネイティブの先生にご担当いただきます。先生方には、CEの目的を説明した上で、前期と後期で扱う英語の分量に配慮しながら、リスニングやリーディングのインプットと同様に、スピーキングやライティングのアウトプットの指導を工夫するように求めています。

(2)評価の見直し

CEクラス間の成績を調整するために、授業担当者の評価と共通テストの評価を按分するに当たり、その割合を決定します。

(3)クラスの規模と編成の見直し

行き届いた指導を行うために、1クラス40人を超えていたのを見直し、共通テストの成績に基づき、25人程度を基準として、習熟度別クラス編成を実施しています。



ここまでは、EEDCがこれまでに行ってきたカリキュラムに関する業務内容を紹介しました。他方、EEDCは、必修科目のCE及び選択科目のACE以外に、市大生の英語力向上を図るために、以下に示す機会や環境を提供しています。

(4) English Café

市大生の英語の自主学習を支援するために、英語教育開発センターの隣に自習室(English Café)を用意しています。部屋にはコンピュータが15台あり、午前9時から午後5時までネット対応のTOEIC対策用ソフトNetAcademy2が自由に使えます。



(5) オフィス・アワー

CEやACEの授業以外でもネイティブの先生と話をし、運用能力を高めるために、月曜、水曜、木曜の午後4時半から5時半まで、English Caféを使って、ネイティブの先生と楽しく会話する時間を設けています。



(6) 海外語学研修

普段の授業で培った英語力を、実際の場面で使う体験を通してさらに強化する目的で、昨年度、カナダのビクトリア大学英語センターと本センターで協定を結び、3月に約1ヶ月語学研修を実施しています。第1回研修には、学部生27名が参加しました。



最後に

2007年4月に誕生した英語教育開発センター(EEDC)がこれまで無事に運営して来られたのは、EEDCスタッフの努力だけでなく、温かく見守り、折に触れてEEDCの活動をご支援くださった学生支援課、総務課、並びに大学教育研究センターの関係者のお陰です。ここに改めて感謝申し上げ、さらなる市大生の英語力向上に向けて、EEDCは進化を続けます。

大学院文学研究科准教授

英語教育開発センター副所長 井 狩 幸 男

ウチの学部・研究科ではこんな教育を行っています！

商学部・経営学研究科

学生を「成長」させる教育プログラム 「考える実学」を発展させた「インタラクティブ型キャリア教育」の実践

商学部では、平成19年度より3年間、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（略称、現代GP）」（GP(Good Practice)とは「優れた取組」を支援するために全国の大学から公募しているプログラムです）に採択されて取り組んできました。採択テーマは、「インタラクティブ型キャリア教育の確立—BRCを通じた経営学系（商学部）の専門教育とキャリア教育との融合—」（実践的総合キャリア教育分野）です。

このプログラムは、学生がビジネスの現場に入り込み、現場が抱える課題に擬似的に向き合うことで、「自ら問題や課題を発見し、解決する」能力を高める教育方法を開発することが狙いです。具体的には、学生はユニークな経営者や現場との交流を通じて、大学で習得した知識とは異なる「考え方」や課題に触れて、専門教育で修得する理論の意味や重要性を再認識するとともに、場合によっては、習得した理論では現実の説明できないとして理論の修正を迫られることもあります。このように「理想的な理論と実務とのインタラクション」を経験させることを意図しています。従来からのインターンシップというプログラムもありますが、あくまでも個人の体験にすぎません。本プログラムは大学のカリキュラムの中に位置づけられながら、仲間とともに段階的に能力を高めていくという教育プログラムなのです。

今回の教育プログラムは「キャリア・デザイン論」、「プロジェクト・ゼミナール」という科目に具体化されて、従来、商学部が提供してきた教育カリキュラムの内容を豊富化しています。つまり、右図に示されていますように、第1のセメスター制の下で1回生を対象とした第1学期のプロゼミナールをはじめ専門基礎の経済、経営、会計と7つのコース概論を経て専門科目の修得へ体系的に発展していくカリキュラム、第2の3年次第4学期からの少人数の専門ゼミナールとその集大成としての卒業論文までのプログラムに加わることで、より鮮明な問題意識や課題をもって専門ゼミナールに臨み、すぐれた卒業論文へと結実することを期待しています。

それでは新しい2つの科目「キャリア・デザイン論」、「プロジェクト・ゼミナール」についてです。前者は、学外講師からこれまで仕事面で苦労したことを講演いただき、そ

の上で受講生に対してミッションを与えていただき、受講生はグループに分かれて、その解決策を企画してプレゼンし、学外講師を中心に私たちが評価し、優秀賞を決定するというものです（解決策はパワーポイントで作成し、決められた時間内にプレゼンテーションされます）。1講師について4回の授業をあてます。「思考リテラシー」という「考える」作法、つまり考え抜き、他者に伝え切り、評価を受けて自らにフィードバックして考えることを身につけるのです。

後者はビジネスの現場の有する課題に学生が擬似的に向き合うことや現場の事業者との交流を通じて、さらに能力を高めるといった実践的総合キャリア教育の核心をなすものです。1セメスター期間中に、パートナー企業との間で構想されたプロジェクトの解決を図ります。こちらは担当教員とパー



「キャリア・デザイン論」の授業風景

トナー企業との組み合わせで種々のあり方が生み出されるために一般化は難しいのですが、たいていパートナー企業との間で顔合わせ、中間、そして最終の3回のインタラクションを設け、その際に実施した作業について交流します。



「プロジェクト・ゼミナール」で作成した会社案内

「キャリア・デザイン論」、「プロジェクト・ゼミナール」とも、受講生は「100%」のつもりで作業を終えますが、学外講師やパートナー企業からは予想以上に厳しく評価をいただき、その時点では「へこんで」しまいます。それでも、受講生はその「厳しい評価」を「次」の機会に生かしていきます。新たな教育プログラムによって確実に商学部生はこれまで以上に「成長」しています。そして、今年度で現代GP事業としては終了しますが、次年度以降もプログラム自体は継続されます。

大学教育研究センター兼任研究員
商学部・経営学研究科教授 中瀬 哲史

大学教育研究センターは 「こんなこと」に「こんなメンバー」で 取り組んでいます!

RDHE Osaka City University
Center for Research &
Development of Higher Education
大阪市立大学 大学教育研究センター



FD 活動

(1) FD 研究会 (年 1 回)

FD 研究会は、大阪市立大学における教育の向上を図るための組織的な研修や教育に関する研究活動の成果に関し、全学的な交流をはかる場として設定されています。例年、100 名前後が参加する大きな研究会です。2009 (平成 21) 年度の全体のテーマは「本学の FD の現状と課題 ~ 教育を充実させる組織的 FD とは?」でした。



(2) 教育改革シンポジウム (年 1 回)

教育改革シンポジウムは、全学的に共有が可能なホットトピックについて、大学内外の情勢を鑑みながら考えを深めることを目的に開かれています。第 16 回目を迎えた 2009 (平成 21) 年度は、大学教育学会の課題研究集会と共同で「学士課程における教養教育再考」をテーマに開催しました。基調講演では大阪大学総長の鷲田清一先生に「教育への問いかけ」をテーマにお願いいただきました。



(3) FD ワークショップ・大学教育研究セミナー (年 2 ~ 4 回)

FD ワークショップと大学教育研究セミナーは、ワークショップ形式またはラウンドテーブル形式等を取り、主に学内の参加者間で授業デザイン事例など教育実践事例や大学教育にかかわるホットトピックの紹介とそれらについての意見交換を行う場として設定されています。

研究成果の発信と広報

(1) 大阪市立大学大学教育研究センター紀要 『大学教育』

主として本学の教育に資する研究成果の発表の場として、学内はもとより全国から投稿を募り、年に 1 ~ 2 回発行する、査読付きの学術雑誌です。センターの FD 活動・研究活動の報告の場でもあります。

(2) 大学教育だより & Un roseau (アン ロソ)

教員および学生を対象として、大阪市立大学におけるさまざまな教育への取り組みをまとめた広報誌『大学教育だより』を年 1 ~ 2 回発行してきました。また、大阪市立大学での学びの道しるべとして全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロソ』を発行し、学生のみなさんに配付してきました。2006 年度からこれら 2 冊を合冊として、より充実した内容として発行し、一層幅広く配付することとしました。

センターの研究活動

高等教育のグローバル化・ユニバーサル化 (進学率が 50 パーセントを超えた状況) がすすむ今日、大学卒業までに学生が最低限身に付けなければならない能力を教育の目標として設定しようという動きが国際的に強まっています。学士課程が大学教育の焦点の一つとなっ

ているのです。

こうした動向をふまえて、センターでは本学にふさわしい学士課程教育のあり方を探るために、次のような調査研究を進めています。

(1) 本学の学生は何をどの程度学んでいるのか

センターでは、発足以来、全学共通教育の授業アンケートを実施してきましたが、学生の学びを重視した教育への転換を図るための課題を知るには授業アンケートに限らず多角的な調査開発が必要であるとの判断から、新たな調査研究に着手しました。「本学の教育に関する調査」として、2009 年 7 月に実施した調査がそれです。この調査では、「各専攻分野を通じて培うべき学士力」として中教審答申が参考指針に挙げた目標が、本学の全学共通教育や専門教育、学生生活をとあしてどの程度身につけられているのか等について、学生に自己評価を求めることにより明らかにしようとした。学生の学びの現状を全学的に調べるためのはじめての試みであったわけですが、結果は、コミュニケーション・スキルや問題解決力、自己管理能力などを身に付けていることが明らかになるとともに、国際性や情報スキル、リーダーシップの涵養という面では課題もみられることがわかりました。

(2) 入学者追跡調査・卒業生アンケート調査

教育の成果や効果を測定することは容易ではありませんが、市大に入学した学生の皆さんが在学期間に学び、卒業していくプロセスをたどることで市大の教育の課題を浮かび上がらせるためには、時間をかけた追跡調査が必要です。そこでセンターでは、二つの調査を行ってきました。一つは入学者追跡調査、もう一つは卒業生アンケート調査です。

入学者追跡調査は、ある年度に入学した学生の皆さんの高校在学時、入学試験、本学在学時の成績等の相関を調べ、そこから浮かび上がる特徴を知ることから教育改善のための課題を探ることを目的に行われました。それにより、高校での成績と大学での成績に高い相関がみられたことや、大学在学中の学業を成功裏に進めるうえで入学直後の学習状況が非常に重要であることなど、これからの市大の教育のあり方を考えるうえで重要な知見が得られました。

また、2009 年末には卒業生アンケートを計画・実施しました。これは、同窓会の協力をいただいて、4 年間市大で学んだ卒業生の皆さんが、社会に出て約 3 年を経た時点で、市大で学んだことをどのように捉え評価しているのかを調べるために行われました。結果は近々公表の予定です。

(3) FD のあり方について

市大にふさわしい学士課程教育は、センターのみで実現できることではありません。本学が掲げる大学の理念、人材養成目標・教育目標を本学の教員をはじめ、全構成員が共有し、その実現のために協力し合うことが必要です。大学教員が自らの専門的能力を開発するために行う活動は、FD (ファカルティ・ディベロップメント) と呼ばれていますが、センターでは FD を、教育を改善するための自律的な協働的取り組みとしてとらえ、FD 研究会や、教育改革シンポジウム、授業デザインワークショップなどの企画・実施、各部署での FD への協力などを行っています。

教育改善につながる FD のあり方もまた、センターが現在取り組んでいる重要な検討課題です。大学の全構成員がかかわる FD を目指して、市大にふさわしい FD の考え方をまとめ、全学に提案しているところです。

大学教育研究センター紹介

学生たちの手紙に対する教育担当副学長の返信

教育担当副学長の中村です。

飯吉先生の「現代社会と大学」の講義の受講生諸君から、副学長就任以来、この4年間で、中村へのお手紙二百数十通を寄せていただきました。* 本来なら、毎年、一通ずつにお返事をするべきところであったのですが、その余裕がありませんでしたので、申し訳ありませんが、今回、この誌面をかりて、私の返書に代えることにします。

お手紙の内容は、じつにさまざまでしたが、もっとも多かったご意見は、大学の授業に関するものでした。それもいろいろの内容がありましたが、教員の授業内容や授業方法とその改善、国際化教育やキャリア教育の充実が中心で、それ以外にも授業アンケート、成績評価、履修制限などについて、さまざまなお考えが述べられておりました。また、授業以外にも、本学の知名度をあげることに、特色を明確にし、それをひろく社会に伝えること、大阪や地域と深く関わった大学をめざすことなど、さまざまな提言がありました。

これを拝見しまして、私は学生諸君が、日常の教育や学生生活についてはもちろんのこと、大阪市立大学それ自体に対しても、高い関心を抱き、また大きな期待を寄せて下さっていることを知り、強い感銘を受けました。このような多数の手紙に接し、本学の教育全般についての責務を負う一人として、私は大きな責任を感じた次第です。

皆さんご存じのように、大阪市立大学は全国有数の長く優れた歴史と伝統を持つ、最大規模の公立総合大学です。



私たちはこの大学の特色を

「都市型総合大学」という言葉で象徴させ、他の大学にはない特色ある教育と研究、そしてそれを通して社会への貢献を進めようとしています。

いま、日本の大学は国際的にも国内的にも、さまざまな新しい状況の中で、教育の質をさらに向上させるよう、教育の改革を迫られています。その中でも、学士課程教育として概括されるさまざまな教育改革は、大阪市立大学にとっても重要な課題です。授業内容の充実と授業方法の改善はもちろんのことですし、たとえば、入試やカリキュラム、卒業資格に関する大学としての基本方針の策定、教育成果の測定、単位の実質化、成績評価の厳格化など、いずれもたいへん難しい問題です。これらの多くは諸君のお手紙にも触れられていたこととも関連しますが、これから全学をあげて取り組んでゆかねばなりません。

本学の教職員は、私たちをとりまいている状況を十分に認識し、私たちにとってもっともふさわしく、より充実した教育を展開できるよう努めていくつもりですが、学生諸君もこの状況をご理解いただき、学生の立場で本学の教育改革にご協力いただくことを切に願って、諸君への書信を結びたいと思います。

中村 圭爾

大学の変化・あり方について考える授業活動の一貫として、受講学生が、本学の教育のあり方に関する意見や自分たちの関わり方について、教育担当副学長に宛てた署名入りの手紙として書いたもの。

大学教育研究センタースタッフの紹介 (平成22(2010)年3月現在)

■ 所長

中村 圭爾
副学長

■ 専任研究員

矢野 裕俊

副所長 大学教育研究センター教授
研究分野 … 生涯学習社会における
学校教育の役割/学校カリキュラム

大久保 敦

大学教育研究センター准教授
研究分野 … 高校大学の接続/自然
史科学教育/古植物学

西垣 順子

大学教育研究センター准教授
研究分野 … 大学教育の評価に関
する研究/教育心理学

飯吉 弘子

大学教育研究センター准教授
研究分野 … 社会における大学のあり
方に関する研究/教育学/大学教育史

渡邊 席子

大学教育研究センター准教授
研究分野 … 教育支援システムの開
発/キャリア教育/社会心理学

■ 兼任研究員

青山 和司

経営学研究科教授

中瀬 哲史

経営学研究科教授

橋本 文彦

経済学研究科教授

中川 満

経済学研究科准教授

小柿 徳武

法学研究科准教授

早瀬 晋三

文学研究科教授

松浦 恒雄

文学研究科教授

海老根 剛

文学研究科准教授

高橋 太

理学研究科教授

荻尾 彰一

理学研究科准教授

日野 泰雄

工学研究科教授

長崎 健

工学研究科教授

中嶋 弘一

医学研究科教授

廣田 麻子

看護学研究科講師

三船 直子

生活科学研究科准教授

大西 克実

創造都市研究科准教授

荻田 亮

都市健康・スポーツ
研究センター准教授

■ 事務局

染川 章文

学生支援課長

服部 崇司

学生支援課員



大学教育研究センター紹介